

# 音楽を「つくって表現」する学習の授業構築に関する一考察

## —創造的音楽学習の理念の再考—

小 曳 加奈子

(本講座大学院博士課程前期在学)

### I. はじめに

『*Sound and silence*』(Paynter, J., Aston, P.)の翻訳である『音楽の語るもの』(山本茂茂、坪能由紀子、橋都みどり訳)が1982年に出版されたことによって、創造的音楽学習<sup>1)</sup>が我が国に伝わり、平成元年度の学習指導要領の改訂にもなって、創造的音楽学習の学習方法が音楽科教育へ導入された。そして、それは音楽を「つくって表現」する学習<sup>2)</sup>として紹介され、小学校音楽科で多くの実践が行われてきた。しかし、15年の歳月の間に、この学習に関してさまざまな問題が指摘されるようにもなった。つくった音楽がただ音の羅列に終わってしまい、学習として成立しないという問題や、授業時間数の削減によって、音楽を「つくって表現」する学習にあてる時間がほとんどとれないという問題などである。また教師の中には、音楽を「つくって表現」する学習がもつ意味を正しく理解できないまま、子どもにとって学習内容のない実践を行ってしまう者がいるのも事実のようである。

こうした諸問題を背景に、筆者はまず、音楽を「つくって表現」する学習、すなわち創造的音楽学習の理念を提唱した、イギリスの音楽教育学者 Paynter, J. や、カナダの作曲家 Schafer, R. Murray らの理論の根幹をあらためて読みとっていきたく考えた。さらに、学校現場で実践を行い、彼らが意図した創造的音楽学習の理念と照らし合わせながら、授業の検証を試みていきたく考えるに至った。音楽を「つくって表現」する学習が、学習としてより意味のあるものとなるよう、理論研究と実践研究の両面からアプローチし、その統合をはかっていきたく考えたのである。

今回は、その研究の一環として、広島市内のA小学校で行った3回の実践を報告しながら、音楽を「つくって表現」する学習のあり方を探っていく手がかりとすることを目的とする。

### II. 問題の所在

では、現在小学校で行われている、音楽を「つくって表現」する学習の問題点はどこにあるのだろうか。まず、創造的音楽学習の理念と、実際に現場で行われている授業実態との相違を図にまとめたものを示す。その上で筆者は、以下の3点をその主な問題点として位置づけた。

創造的音楽学習で目指されるべき理念	現場での授業実態
○ 子どもたちが自由に音を探しながら活動できるようにする。	→ 自由に行わせているために、子どもの話し声やさざざ音が音より目立ってしまう。また、音楽づくり自体が目的になっており、教師側で、それによって何を学習させるのかが明確でない。
○ 音そのものを大切に作る姿勢を育てる。	→ 子どもは音を出すことに夢中になりすぎて、音を大切にすることはあまり考えていない。
○ 西洋音楽だけでなく、現代音楽、民族音楽、身のまわりのすべての音に注目させ、親しませる。	→ 教師はさまざまな教材を提供するが、子どもが活動を楽しむことだけで終わり、遊びと変わらなくなってしまう。
○ グループでの活動をとおして、仲間と話し合いながら問題解決する能力を育てる。	→ ともすれば音楽活動よりも話し合いが中心となってしまう。発表する場で工夫は見られるが、基本的なアンサンブル能力が欠如している(リズムが合っていないなど)場合もある。
○ 音楽をつくることをとおして、音楽の構造やしぐみについて理解できるようにする。	→ 1つの単元の中に、さまざまな音楽の要素が含まれているので、音楽の構造を理解させようとするなら、それらを1つずつ取りあげることが必要。しかし、今はそれらが入り混じっている。

### 1. 授業規律の確立が徹底されていないこと。

授業規律の確立は、音楽活動のあらゆる面で重要だと考えられる問題である。アメリカの音楽教育学者 Greer, R. D. は、音楽の授業における学習者の行動を、社会的行動・音楽的予備行動・音楽的行動という3つのカテゴリーに分類し、「音楽的行動を確立させるには、それを支える広範囲な音楽的予備行動の確立が不可欠であり、さらにその音楽的予備行動の確立には、それを支える広範囲な社会的行動の確立が不可欠である」<sup>3)</sup>とした。

特に音楽を「つくって表現」する学習の場合、音そのものへの集中や、音への敏感な気づきが重要となってくる。そのため、ほんの少しの物音でも、学習にとって障害となる場合がある。ましてや子どもどうしの私語ともなれば、学習が意味を成さなくなることさえある。

しかしながら、音楽を「つくって表現」する学習では、子どもの自主性や主体性を尊重することによって、子どもどうしが話し合ったり、考えを出し合ったりする場を設けることが多い。つまり、授業規律が乱れやすい環境をつくりがちになるのである。教師が細心の注意を払って授業を進めなければ、学習自体があいまいなものに終わってしまう危険性が存在する。

### 2. 前提としての技術面の指導が徹底されていないこと。

音楽を「つくって表現」する学習では、音楽の苦手な子どもでも楽しく取り組むことができるというメリットが挙げられることがある。しかし、実際のところ、基礎的な技術力の土台がなければ、「ただつくった」で終始してしまう危険性が大きいのである。しかも、評価する教師の音楽性しだいで、どのような作品でも「すばらしい」とされてしまう場合があることも大きな問題である。

### 3. 学習に系統性がないこと。

音楽を「つくって表現」する学習の実施に関して、教師用にさまざまな指導書が出版されているが、そのほとんどが単発の事例であり、その順序にあまり重きが置かれていないのも特徴である。

その理由の1つに、PaynterやSchaferの著書では、各プロジェクトが並列されており、ある程度はどこから始めてもいいように書かれてあるということがあるかもしれない。しかしそこでは、小学生だけでなく、中学生や高校生、または大人を対象としての実践までできるように設定されている。「ここに示されたプロジェクトのどれかをもとにして、子どもたちにたくさんの音楽を教えることのできる学習計画を自ら工夫していただければよい」<sup>4)</sup>とあるように、あくまで考え方のヒントが載せられているにすぎないのである。

したがって、音楽を「つくって表現」する学習を実践する際、ただ単発的に行ってしまうと、何を目的として行っているのかを見失うことがある。さらには子どもたちにとっても、学習で得られる知識や能力を蓄積しにくいということにもつながるのではないかと考えられる。

## Ⅲ. 授業実践の目的

これらの問題点の改善策として、筆者は以下の3つの観点を中心に、授業実践を行うこととした。

### 1. 授業規律に関して

音を聴くためには、まずは沈黙がなければ成り立たないということを子どもたちに意識させ、徹底をはかる。子どもの集中力が切れそうになれば、静かに集中するまで待つというような忍耐力と、強い意思をもって指導にあたる。

### 2. 学習の前提となる技術力に関して

今までの、音楽を「つくって表現」する学習の実践においては、1回の授業の中に、さまざまな音楽の要素、たとえばリズム、強弱、和声などの内容が入り混じっており、そこが学習を中途半端なものにする根源だったように思われる。したがって、そうした音楽の諸要素を1回の授業でなるべく1つずつ取りあげ、シンプルな形で示したい。そうすることで、子どもたちにとっても学習がより整理でき、分かりやすくなるのではないかと考えている。

その上で、とりわけ1人ひとりの子どもの発言から、その子のもっている語彙力・判断力・理解力・聴取力・表現力などをできる限り読みとり、それらを学習の基礎的な技術力として位置づける。

### 3. 学習の系統性に関して

小学校6年間をとおして、音楽を「つくって表現」する学習を継続的に行うことを前提とする授業設定を目指した。(今回の実践はその初期段階のもので、主に低学年に対して実施する。)

まず低学年でもっとも重視する学習内容は何か。Paynter や Schafer の著書によれば、音楽づくりにおいて基本的な要素となるのは「沈黙を知ること」だとある。Paynter は「これまでのプロジェクトでやってきたような音楽を作るとき、私たちはどうかすると今作ろうとしている音 (sound) だけに注意が行ってしまって、音楽的継続体の中で沈黙 (silence) がどんなに重要であるかをともすれば忘れてしまいがちである。」<sup>5)</sup> と述べている。このように、子どもが沈黙を知ることによって、音そのものに興味を抱くこと、そして音に対する集中力を高めることが、とりわけ学習の初期に土台とするべき内容であると考えられる。

これから示す学習過程の中で、ポイントとなる発話や反応として、① 授業規律に関するものを棒線、② 子どもの技術力に関するものを破線、③ 学習の系統性に関するものを波線で示した。

なお、本授業実践の内容は、おもに Schafer 著『HearSing』(2005)<sup>6)</sup>、および Paynter 著、坪能由紀子訳『音楽の語るものⅡ—音楽をつくる可能性』(1994)<sup>7)</sup> の指導事例を参考にしながら構成した。

#### IV. 授業実践の経過

1. 第1回授業 2005年11月28日

- (1) 対象児童 広島市内のA小学校 2年2組 (男子20名、女子20名)
- (2) 単元 Let's音遊び ～耳をダンボにして聴いて<sup>8)</sup> みよう!～
- (3) 単元について

今日の社会において、子どもたちを取り巻く環境には、ありとあらゆる音があふれているように思われる。道路には車のエンジン音が止まることなく行き交い、スーパーやデパートに立ち寄れば、その店を宣伝する音楽がエンドレスで流れている。このような状況の中で、子どもたちは「音」というものの存在に対して鈍感になっているのではないだろうか。自分の生活環境の中にも音がありすぎるために、本来心地よく思えるような音でも、それが「心地よい」と気づかなくなっているのである。さらに、自分が今発している音に対しても、それがまわりの人にとって「うるさい」ものなのかどうか分からなくなっている場合がある。すなわち、子どもたちは音の受信者としての意識、そして発信者としての意識を十分にもっていないと考えられるのである。

音楽科において、子どもが「音を大切に使う」姿勢をもつことは、授業を行う上でもっとも重要な要素の1つであると考えられる。すなわち、子どもたちが音の優れた受信者、発信者となることは、歌唱・器楽・創作・鑑賞のどの学習活動にとっても、良い表現をもたらすことにつながると言えるだろう。

そこで本単元では、子どもたちがふだんは気にとめない音をより意識して聴くことができるように、彼らに簡単な音遊びを体験させることでその能力を培おうと考える。とりわけ、まずは子どもたちが「静けさ」を感じることができるような導入を行い、「静けさ」の中に流れる音を意識できるようにしたい。また、低学年の子どもが自然に「静かにすること」「音を集中して聴くこと」を意識できるように、音遊びの内容は、ゲーム形式で親しみやすく、楽しんでできるものを目指した。

(4) 本時の目標

- 自分たちのまわりにどのような音があるのか気づき、興味をもつようにする。
- 音遊びの中で、聴いた音に対して正しく反応できるようにする。
- 音を集中して聴く活動をとおして、「静けさ」があるからこそ、そこに音が存在するのだということに気づけるようにする。

(5) 学習過程

学習活動	指導の意図と手だて	評価の観点	教師の発話と子どもの反応
<p>＜導入＞</p> <p>1. 目を閉じて、まわりの音を聴く。(10分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 耳を外の世界に向け、まわりの音に関心をもつようにする。</li> <li>・ 教室に入ったときに子どもがざわついているようなら、これから行う活動の雰囲気をつくるように教師が働きかける。</li> <li>・ 静寂の時間は2分ほどとる。</li> <li>・ どんな音が聴こえたか、発表させる。</li> </ul>		<p>教師 (T) : (活動への集中力を起こさせるために) ゲームをします。先生の鏡になってください。(手を体のどこにあてるか、見てまねさせる。)</p> <p>子ども (C) : はい。(楽しそうにやっている。)</p> <p>T : みんなのまわりには、どんな音があるかな。</p> <p>C1 : 包丁で切る音。</p> <p>C2 : 車の音。</p> <p>T : 目を閉じて、まわりにある音を静かに聴いてみよう。</p> <p>C : (静かに聴いている。)</p> <p>T : (2分たち) どんな音が聴こえましたか。</p> <p>C : (勢いよく手があがる。)</p>

<p>＜展開＞</p> <p>2. 鈴のついたキーホルダーを使って音遊びのゲームを行う。(15分)</p> <p>＜やり方＞</p> <p>① 鬼は円の真ん中に立つ。</p> <p>② 合図が出たら、鬼以外の人は目を閉じる。</p> <p>③ 鬼は音を鳴らして円の中の誰かに近づく。</p> <p>④ 音が鳴りやんだとき、鬼が自分の前にいると思ったら手をあげる。</p> <p>⑤ 目をあけて、手をあげた人の前に鬼がいれば勝ち。外れたら鬼の勝ち。</p> <p>3. 足音を使ってゲームを行う。(15分)</p>	<p>○音が自分の近くに近づいてきたかどうか気づき、反応できるようにする。</p> <p>・あらかじめ、子どもたちは円形になっているようにする。</p> <p>・活動を円滑に進めるために、本時の目標、ゲームの手順、ゲームを行う上での約束ごとを書いた模造紙を、黒板に貼っておく。</p> <p>＜約束4箇条＞</p> <p>1 鬼が音を鳴らすときにははっきりとその音に耳をすます。</p> <p>2 鬼になった人も真剣にやる。</p> <p>3 音が鳴り始めてから鳴りやむまで、目は閉じたままにする。</p> <p>4 同じ人が鬼になったり、同じ人が当たったりしないようにする。</p> <p>・最初は教師が鬼になり、慣れてきたら子どもと交代して、子どもどうして楽しませるようにする。</p> <p>・同じキーホルダーを2つ用意し、鬼の数を2人に増やして再度行うようにする。</p> <p>・半数がゲームを行い、半数がその様子を見る場を設け、友だちがしっかり音を聴いて反応しているかを見合う機会をつくる。</p> <p>○キーホルダーの音より足音のほうが、より集中しなければ音が聴こえてこないということが分かるようにする。</p> <p>・足音を用いて、2と同じ要領でゲームを行うようにする。</p>	<p>・集中して音に耳をすましているか。</p> <p>・ゲームに積極的に取り組んでいるか。</p> <p>・音が近づいてきたら、正しく反応しているか。</p> <p>・ゲームの様子を意欲的に観察しているか。</p> <p>・友だちの姿を見ることによって、より音を集中して聴いているか。</p> <p>・2の活動よりも、さらに耳をときすませて音を聴く姿勢を見せているか。</p>	<p>C3: 中学校のチャイムの音。</p> <p>C4: 何か(子どもの筆箱)が落ちる音。</p> <p>T: (もつと踏み込んで)近くで聴こえる音と遠くで聴こえる音は、どう違ったかな。</p> <p>C5: 遠くの音なら目を閉じなくても聴こえるけど、近くの音は目を閉じないと、こすれあう音とか聴こえない。</p> <p>T: 今いいことに気づいたね。静かに集中しないと、筆箱が落ちた音も聴こえないかもしれないね。今日は、これから音を集中して聴く練習をするよ。</p> <p>C: はい。</p> <p>T: 紙を貼るから、静かに待っててね。</p> <p>C: (数人、足をぶらぶら。)</p> <p>T: では、ゲームをやるので、大きな円になりましょう。いすをがたがたさせないで、集中して。</p> <p>C: (少しおしゃべり。)</p> <p>T: (鈴を鳴らしながら、手順を説明。)</p> <p>C: 鈴だー! (興味をもっている。)</p> <p>T: 正解は1人だけだよ。約束ごとがあります。(大声で読む。) いいかな。</p> <p>C: はい。(そそわわしている。)</p> <p>T: 集中してね。(静かになるまで待つ。)</p> <p>T: まず先生が鬼ね。(やる。)</p> <p>C: (対象者含む3人が手をあげる。)</p> <p>C: おー! (賞賛の声。)</p> <p>T: 音がちゃんと分かった?</p> <p>C: 分かった! (口々に。)</p> <p>T: ではさっそく・・・</p> <p>C: はい!! (勢いよく手があがる。)</p> <p>T: C6をあてる。</p> <p>C6: (ゆっくりと円をまわりながら、とまる。)</p> <p>C: (対象者含む2人が手をあげる。)</p> <p>C: (他の子ども、拍手。)</p> <p>T: (C6へ) 鬼やってみてどうだった?</p> <p>C6: 楽しかった。</p> <p>T: じゃあ次ね。(2人あて、同じように進める。)</p> <p>T: 最初のゲームをやって、どうだった?</p> <p>C7: どこに行くか分からなくて緊張したけど、楽しかった。</p> <p>T: その分集中して聴けたかな。</p> <p>T: レベルアップだよ。鈴を2個にします。</p> <p>C: え〜! でもできるよ。(意欲的な様子。)</p> <p>T: (2人鬼をあてる。)</p> <p>C: (集中力が切れかけている。)</p> <p>T: さっきより集中しないと、聴こえないよ。</p> <p>C: (鬼の2人は、相談して動く方向を決めている。)</p> <p>T: 聴いてみて、どうでしたか。</p> <p>C8: 1つの音のときより、大変だった。</p> <p>T: そうだね。もっと耳をダンボにしないとね。</p> <p>T: では、上達してきたので、もっとレベルアップするよ。今度は足音だけだよ。</p> <p>C: えー!</p> <p>T: 足音は、鈴の音より小さいから、もっと耳をすませてね。鬼の人も、鳴らし方を工夫してね。(C9をあてる。)</p> <p>C9: (比較的、音を鳴らしながら歩く。)</p> <p>C: (正答率が良い。)</p> <p>T: (C9へ) どんどころに工夫した?</p> <p>C9: 鳴らしすぎないように、みんなが分かりにくいように頑張った。</p> <p>T: あと1人ね。(C10をあてる。)</p> <p>T: (C10へ) なるべく音をさせないようにしてね。</p> <p>C10: (音をさせないように歩く。)</p> <p>C: (正答率が良い。)</p> <p>T: みんなすごいね!!</p>
--	---	---	---

<p>《まとめ》 4. 本時の学習のまとめを行う。 (5分)</p>	<p>○ 音遊びの活動を振り返りながら、「静けさ」の中に「音」が存在しているのだということに気づくようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ゲームをしてどのようなことが分かったか、またどのようなことを感じたのかを発表させる。</li> <li>・ 教師の働きかけによって、発表をクラスで分かち合うようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ キーホルダーの音、足音というそれぞれの音の聴こえ方の違いに気づいているか。</li> <li>・ 静かな中にこそ音が聴こえるということを理解しているか。</li> <li>・ 友だちの発表を真剣に聴いているか。</li> </ul>	<p>T: 今日のゲームで、どんな感想をもちましたか。 C11: いろいろな音が聴こえた。最後のゲームは、あまり音が聴こえなかったので、自信がなかった。 C12: 最後のゲームのとき、鬼が向こうに行っているときは気づけなかったけど、こっちに来たときには、足の「きゅつきゅつ」という音が聴こえた。 T: すごい。そんな小さな音まで聴こえたんだね。こんな風に、たまには静かにして、まわりの音、自然の音を聴いてみてね。ざわざわしているときに、「うるさい」と気づけることも音を大事にしているということだよ。忘れないでね。</p>
--	--	---	--

2. 第2回授業 2006年1月19日

(1) 対象児童 第1回授業と同様。

(2) 単元

Let's 音遊び② ～近くで聴こえる音と遠くでも聴こえる音を比べてみよう！～

(3) 単元について

音を集中して聴くことをねらいとした前時のゲームをとおして、子どもたちは、ふだんは聴こえない小さな音があることや、同じ音でもその聴こえ方が異なる場合があるということを示し意識できたように思われる。

そこで本時は、そこからもう一步踏み込んで、子どもたちの音に対する関心がさらに深まるようにしたいと考え、授業を設定した。具体的には、「近くでしか聴こえない音」「近くでも遠くでも聴こえる音」といった距離を基準とする音の分類作業を行い、実際に音を出しながら、その違いを確かめてみるというものである。

ただし、授業を行う上での留意点がある。音楽活動において、本来「音（の種類）」と「音の聴こえ方」はセットで考えられるものであるが、今回は子どもが混乱するのを防ぐため、両者を分けて授業設定を行うことにした。すなわち、「音自体」に焦点をあてたのが本時の授業であり、次時の授業では「音の聴こえ方」に焦点をあてて実践を行う。最終的にはこの2つの授業をとおして、子どもたちが、「身のまわりの音にはさまざまな種類があり、さらにその聴こえ方は音のある場所やその出し方によって異なる」ということを2段階で理解できるようにしたい。

(4) 本時の目標

○ 音を実際に聴き比べながら、身のまわりには、近くでしか聴こえない音と近くでも遠くでも聴こえる音があるということに気づけるようにする。

○ その気づきをもとに、より音に対する関心をもち、音に対する集中力を高めるようにする。

(5) 学習過程

学習活動	指導の意図と手だて	評価の観点	教師の発話と子どもの反応
<p>《導入》 1. 前回行ったゲームを簡単に振り返る。 (5分)</p>	<p>○ 前回どんなことをやったのか思い出すことで、音に対する関心を再び喚起できるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 適宜、子どもに発表させる。</li> <li>・ おそらく忘れていていると思われるので、教師が問いかけながら、どんなことをやったのか子どもが思い出せるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教師の問いかけに対して、真剣に考え、意欲的に答えようとしているか。</li> </ul>	<p>教師 (T): 前回やったこと、覚えてますか。 子ども (C): はい。(3分の1くらい挙手。) C1: 鬼が鈴を持って動いて、鬼じゃない人は「鬼がどこにいるのかな」と考えて、鬼が自分の前にいると思ったら手をあげる。 T: しっかり説明してくれたね。そのときの目標、覚えてるかな? C: (忘れている。) T: 耳を・・・? C: あっ! (数人挙手。) C2: 耳をダンボです。 T: そうですね。目を閉じて、音を聴いたのを覚えてますか。どんな音が聴こえたかな? C3: 何かが落ちる音。 C4: 電車の音。 C5: 車の音。 T: じゃあ、電車や車の音は近くで聴こえた? 遠くで聴こえた? C: (全員が、遠くで聴こえた音に挙手。)</p>

<p>《展開》</p> <p>2. 教室で座っているとき、近くでしか聴こえない音、遠くでも聴こえる音を探して、それらを分類してみる。(20分)</p> <p>3. 分類した音が、本当にそのとおり聴こえるのか、音を出して確かめる。(15分)</p>	<p>○ 音の分類をしながら、距離による音の違いが視覚的に理解できるようにする。</p> <p>・ 子どもが目を閉じてまわりの音に意識を向けるようにする。2分くらい時間をとる。</p> <p>・ その後、聴こえた音を発表させ、その音が「近くでしか聴こえない音」か「遠くでも聴こえる音」かを分類させる。</p> <p>・ 機に応じて、教師側が「この音はどっちに入るか?」と問いかけてもよい。</p> <p>・ 教師は分類を黒板に書きす。</p> <p>・ 分類の基準を以下のように示す。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>「近い」・・・となりの子にしか聴こえない。  「遠い」・・・教室の外からでも聴こえる。  ※ 子どもが今座っている位置を基準として、そこから「近い」か「遠い」かを判断するようにさせる。  ※ 「近い」と「遠い」の真ん中の音については、視覚的に距離感が分かるように板書する。</p> </div> <p>・ 時間があれば、子どもが近くの友だちと話し合い、分類を確かめるようにさせる。</p> <p>○ ただ頭で分類するだけでなく、実際に音を感じながら、距離による音の違いを確かめることができるようにする。</p> <p>・ 2の分類で挙げられた音の中から、確かめることができるものを選んで、そのように聴こえるかどうか音を出して確かめる。</p> <p>・ 3～4つくらい選ぶ。</p> <p>・ 子どもがざわざわしないように、教師はなるべくテンポ良く進めるように努める。</p>	<p>・ 集中して音に耳を傾けているか。</p> <p>・ 基準を踏まえて、正しく分類できているか。</p> <p>・ 友だちの発表をしっかりと聴いて、判断しようとしているか。</p> <p>・ 音をじっくりと積極的に聴いて、確かめようとしているか。</p> <p>・ 集中して活動に臨むことができているか。</p>	<p>T: 何かが落ちた音は?</p> <p>C: (数人) 近くで聴こえた。</p> <p>T: 音には、近くで聴こえる音と遠くで聴こえる音、2種類があります。今日は、この2つの音がどう違うのか確かめてみようと思います。(今日の目標を貼る。)</p> <p>C6: 部屋の中が「近い」なんですか?</p> <p>T: いいことに気づいたね。「近く」「遠く」とはどこをさすのか、基準があいまいだね。だから・・・(「分類の基準」を貼って説明。)</p> <p>C: (長いので、少し飽きてきている。)</p> <p>T: 大丈夫かな?じゃあ、やってみようか。</p> <p>C: (姿勢を直す。)</p> <p>T: まずは、遠くから聴こえる音に耳をすましてみましょう。静かに、集中してね。</p> <p>C: (目を閉じる。集中している。)</p> <p>T: (1分半ほどたって) 何が聴こえた?</p> <p>C7: 「わっしょい、わっしょい」って音。</p> <p>C8: あっちから聴こえたよ。(指さす。)</p> <p>C: (数人が口々に) いや、こっちだよ!</p> <p>T: 元気なかげ声が聴こえたよね。(板書。) 他には?</p> <p>C9: カラスの鳴く音。</p> <p>C: (半数くらいが) 同じです。</p> <p>T: どんな声だった?</p> <p>C9: 「カア、カア、カア、カア」って4回。</p> <p>T: うまくまねしてくれたね。(板書。) 他は?</p> <p>C10: 電車の音。「ぼっぼー」って。</p> <p>C11: それは掃除の音だと思っ。</p> <p>T: 先生は聴こえなかったよ。すごい。</p> <p>C: (多数がざわめく。)</p> <p>C13: トラックの「ごおー」って音がした。</p> <p>T: 大きな音がしたね。どんな感じがした?</p> <p>C13: あれはゴミ収集車の音だと思っ。</p> <p>T: 音だけで分かるなんてすごいね。</p> <p>C: (数人) まだあります。</p> <p>C14: 運動場の声。</p> <p>T: かけ声とは別で?</p> <p>C14: かけ声ほどはつきりは聴こえなかった。</p> <p>C15: (運動場だけじゃなく) 体育館でも声<del>が</del>した。</p> <p>T: まだある?もう1人だけね。</p> <p>C16: 電車の音。</p> <p>C17: 「がたん、ごん、がたん」という音。</p> <p>C18: 最初に「しゅー」と聴こえた。</p> <p>T: 発車する音も聴こえたんだね。同じ電車でも、いろんな音が聴こえたね。</p> <p>T: では次は、近くの音を聴いてみよう。</p> <p>C: (数人) もう聴こえました!</p> <p>T: でももう1度、みんなで確かめよう。</p> <p>C: (目を閉じる。)</p> <p>T: (少しして) どんな音が聴こえましたか。</p> <p>C19: 足音。</p> <p>C20: 足をぶらぶらさせる音。</p> <p>C21: 「ごー」という低い音。</p> <p>C22: スチームの音だと思っ。</p> <p>T: 「近い」と「遠い」の中間だね。(板書。) 他には?</p> <p>C23: 服のこすれる音。</p> <p>C: (半数くらいが) 同じです。(実演している子もいる。)</p> <p>C24: せきをずる音。</p> <p>T: この音はとなりの人にしか聴こえない?</p> <p>C: (反応すい。発言したい様子。)</p> <p>T: 真ん中あたりかな。(板書。) 他にはどう?</p> <p>C25: 「ぶふ」って笑う声。</p> <p>C: え～!! (大きな笑い。)</p> <p>T: まだありますか。</p> <p>C26: ボタンのとれる音。</p> <p>C27: ボタンがとれたかは分からないけど、似た音は聴こえた。(他の子は実演。)</p> <p>C28: 息の音。</p>
---	---	--	---

<p>《まとめ》</p> <p>4. 本時のまとめと、次時の学習への予告を行う。(5分)</p>	<p>○ 音の分類を振り返りながら、学習によって感じたことをクラス全体で分かち合えるようにする。</p> <p>・ 学習をとおして、どのようなことが分かったか、またどのようなことを感じたのかを発表させる。</p> <p>・ 次時の授業への予告として、「鬼が動かす鈴の音」のように、同じ音でも、近くと遠くでは聴こえ方が異なる場合があるということを知らせ、次は「音の聴こえ方」について考えるということを知らせる。</p>	<p>・ 友だちの意見に真剣に耳を傾けているか。</p> <p>・ 本時の学習を理解したという態度がうかがえるか。</p>	<p>C: (半数くらい) 同じです。(実演している子もいる。)</p> <p>C29: 2回くらい、ため息みたいに聴こえた。</p> <p>T: 息の音は、聴こえた人が多いみたいだからやっぱり真ん中かな。(板書。)</p> <p>C: (勢いよく) まだあります!</p> <p>C30: 足が「ツルッ」っていう音</p> <p>C: (それぞれやってみる。) かかとで鳴るよ!</p> <p>T: これは、すごく近くじゃないと聴こえないかもね。(板書。) となりどうして本当にそんな小さな音がしているのか聴かめよう</p> <p>C: (話し声がうるさくってしまう。)</p> <p>T: そんなに大きな声を出すと、音が聴こえなくなっちゃうからやめてね。</p> <p>T: 同じものから、いろんな音が聴こえるのが分かったかな? 感想言えますか。</p> <p>C31: 遠くで聴こえる音はひびきがあるけど、近くでしか聴こえない音は、すぐ切れる。</p> <p>T: すごい! いい気づきだと思います。</p> <p>C32: 近くでしか聴こえない音と、遠くで聴こえる音が混じってしまって難しかった。</p> <p>T: 聴き分けようと頑張ったね。人間の耳は、聴きたいと思う音を自動的に選ぶようにできてるんだよ。</p> <p>T: 今日は、いろんな気づきがあったね。次は、(鈴を動かしながら) 同じ音でも、近くに行ったり、遠くに行ったりするということを勉強しましょう。</p>
--	--	---	---

3. 第3回授業 2006年2月2日

(1) 対象児童 第1回、第2回授業と同様。

(2) 単元

Let's 音遊び③ ~音が近づいたり遠ざかったりするとき、聴こえ方はどう違うかな?~

(3) 単元について

前時の授業で、子どもたちは「遠くで聴こえる音」と「近くで聴こえる音」の違いにある程度気づくことができた、すなわち「音自体に種類があること」を発見することができたと言えるだろう。

そこで、その学習を踏まえて、本時では「音の聴こえ方」に着目した授業を設定する。ある1つの音が近づくと、遠ざかるとき、また動き回るとき、聴こえ方はどのように変化するのか。さらに、対象とする音が変われば聴こえ方はどのように異なるのか。それぞれの違いを子どもたちが集中して聴きとることができるようにし、よりいっそう音に対する興味・関心を育て、音に対する感受力を高めることができるようにしたい。

その力を身につけることができれば、音楽を「つくって表現する」学習はもちろんであるが、歌唱や器楽、鑑賞といったあらゆる分野に対して、学習が役立つのではないかと考えている。

(4) 本時の目標

○ 音が近づいてくるとき、また遠ざかっていくときの聴こえ方の違いを聴き分けることができるようにする。

○ また、距離による音の聴こえ方の違いを、実際に表現できるようにする。

○ 学習活動をとおして、より音に対する関心をもち、音に対する集中力や感受力を高めるようにする。

(5) 学習過程

学習活動	指導の意図と手だて	評価の観点	教師の発話と子どもの反応
<p>《導入》</p> <p>1. 前回の学習活動を簡単に振り返った上で、本時の目標を理解する。(5分)</p>	<p>○ 前回は近くでしか聴こえない音と遠くでも近くでも聴こえる音を分類したことを思い出し、前回の気づきを振り返る。</p>	<p>・ 教師の問いかけに対して真剣に考え、意欲的に答えようとしているか。</p>	<p>教師 (T): 質問です。この前の授業では、どんなことをしましたか。</p> <p>子ども (C) 1: 遠くの音と、近くの音を聴き比べた。</p> <p>T: よく覚えていたね。(前回使った模造紙をもう一度貼る。) 前回やったことをみんながちゃんと覚えてるか、これからテストします。</p>

<p>適宜、子どもに発表させる。</p> <p>教師が問いかけながら、どんなことをやったのか子どもが思いつけるようにする。</p> <p>○「音が近づいたり遠ざかったりするとき聴こえ方がどう違うのか調べる」のが本時の目標であることを理解する。</p> <p>教師は黒板に目標を掲示し、視覚的に分かるようにする。</p> <p>○「音が近づいたり遠ざかったりするとき聴こえ方がどう違うのか調べる」のが本時の目標であることを理解する。</p> <p>教師は黒板に目標を掲示し、視覚的に分かるようにする。</p> <p>○1人が鈴の音を鳴らしながら教室内を動き回ることによって、音の聴こえ方がどう違うのかを全員で聴き比べるようにする。</p> <p>あらかじめ、子どもたちが教室の右前方（教壇から見て）に固まるように空間設定を行う。</p> <p>音を鳴らす係の子を選び、子どもたちの固まりに近づいたり、遠ざかったりする動きをさせる。その後、いったん全員に聴こえ方の違いを考えさせる。</p> <p>音を聴くとき、集中できるように目を閉じるようにする。</p> <p>○今度は、音を鳴らす子がある程度自由に近づいたり遠ざかったりできるようにし、聴こえ方がどのように変化するかを再度全員で考えるようにする。</p> <p>＜展開＞</p> <p>2. 音が人間と一緒に近づいたり遠ざかったりするとき、その聴こえ方がどのように違うのかを聴き比べる。 (15分)</p> <div data-bbox="168 917 305 1091" data-label="Diagram"> </div> <p>＜教室の簡略図＞</p>	<p>前時の振り返りをもとに、本時の目標をしっかりと理解している様子がうかがえるか。</p> <p>集中して音に耳を傾けているか、友だちの鳴らす音をしっかりと聴いて、その違いを判断しようとしているか。</p> <p>音を鳴らす子どもは、真剣な態度で行っているか。</p>	<p>T: 電車の音はどっちでしょう。(模造紙を指さしながら) どちらかに手をあげてね。</p> <p>C: (全員が「遠くでも聴こえる音」に挙手。)</p> <p>T: 優秀ですね! 服のかさかさする音は?</p> <p>C: (若干迷っている子もいたが、全員「近くでしか聴こえない音」に挙手。)</p> <p>T: じゃあ、(鈴を出し) この音はどっちに入るでしょうか。意見がある人?</p> <p>C2: 近くでしか聴こえない音。外ではたぶん聴こえないから。</p> <p>T: 同じ意見の人?</p> <p>C: (10人くらい挙手。迷っている。)</p> <p>T: でも、この鈴を思いっきりふつてみたら、外にも聴こえるんじゃない?</p> <p>C: (数人) 外にも聴こえる・・・</p> <p>T: 鈴の音は、どっちにも入るんです。今日はこの鈴を使って、近くや遠くに行つたときに、音の聴こえ方がどう変わるか、実験しながら確かめてみましょう。(今日の目標を黒板に貼る。)</p> <p>C: (全員で首読する。)</p> <p>T: それでは、鈴を鳴らしながら動いてもらう人を5人あてます。やりたい人?</p> <p>C: (勢いよく) はい!!!</p> <p>T: (C3～C7の5人を指名。) 呼んだら順番に出てきてください。(C3へ) ゆっくり向こうに歩いてね。音は、近くから・・・</p> <p>C: (数人) 遠くへ行くと。</p> <p>T: そうですね。他のみんなは、音がどう変わるのか聴いてみてね。</p> <p>C3: (やる。)</p> <p>T: 違いが分かったかな? (挙手をさせる。)</p> <p>C: (まだ分かりにくいという子が半数。)</p> <p>T: C3に戻ってきてもらおうよ。音は、遠くから・・・?</p> <p>C: 近くに来る。</p> <p>T: じっくり聴きましょう。</p> <p>C3: (戻ってくる。)</p> <p>T: 違いが分かったかな? (挙手をさせる。)</p> <p>C: (多数が分かった様子。2, 3人がまだ。)</p> <p>T: 次は全員が分かるようにもう一度やってみようよ。</p> <p>C4: (行って戻ってくる。)</p> <p>T: では、意見が言える人?</p> <p>C8: 近くへ来たなら、人が動いているのが分かるような気がした。近くだと音が大きくなって、遠くだと小さくなったから。</p> <p>T: 同じ意見の人?</p> <p>C: (3分の1くらいが挙手。)</p> <p>T: 違う意見がある?</p> <p>C9: 遠くで大きく鳴らしても、近くで小さく鳴らしても同じように聴こえる。</p> <p>C10: 階段をのぼったり、おりたりするときと同じ。</p> <p>T: いろいろな意見が出ました。今の意見を考えながら、もう一度だけ聴いてみよう。</p> <p>C5: (C4と同様に、行って戻ってくる。)</p> <p>T: 今聴いて、別の意見がある人?</p> <p>C11: 真ん中から戻るときに、音が小さくなる感じがした。</p> <p>C5: 同じ強さで鳴らした。</p> <p>T: 意識してないけど、音の強さが微妙に変わったのかもかもしれないね。小さな変化まで、よく聴けたね。</p> <p>T: ではレベルアップです。音の聴こえ方はどのように変わるでしょう。</p> <p>C6: (音をとめたり、たくさん鳴らしたりして、変化をつけている。)</p> <p>C12: 音がとまったりしたけど、人がどこに行つたのが分かる気がした。</p> <p>T: もう1人やってもらおう。(C7を指名。)</p> <p>C7: (C6よりも、変化を激しくつけている。)</p>
--	---	---



<p>3. 人間が場所を移動しないで、音が近づいたり遠ざかったりする様子を表現する。そしてその音の違いを聴きとる。(15分)</p> <p>○ 今度は、音が近づいたり遠ざかったりする様子を人が移動することなく表現することで、聴く側は、2の活動と比較して音の聴こえ方がどうなるのかを考えるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2の活動をもとに、同じ場所でも音が近づいたり遠ざかったりして聴こえるよう鳴らし方を工夫させるようにする。</li> <li>どうやったらそのように聴こえるのか、近くの友だちと話し合いの時間をもうけ、全員に考えさせるようにする。</li> <li>さらに、半分の子どもには目を開けるように、もう半分には目を閉じるようにし、聴こえ方を聴き比べさせるようにする。</li> <li>教師は、機に応じて子どもに挙手させたり、意見を聴いたりして、活動がなるべくクラス全体で分かち合えるように心がける。</li> </ul> <p>《まとめ》</p> <p>4. 学習のまとめを行う。(10分)</p> <p>○ 同じ音でも、近づくとときと遠ざかるときで音の聴こえ方に違いがあること、また人が動かなくてもその違いを音だけで表現できることに気づくようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学習をとおしてどのようなことが分かったか、またどのようなことを感じたのかを発表させる。</li> </ul> <p>○ 残りの時間を利用して、鑑賞活動を行うようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの学習の応用編だということを子どもに意識させる。</li> <li>子どもがよく知っている童謡(「ぞうさん」「ちようちよ」)を教師が演奏する。</li> <li>そのとき、「だんだん近づくように」「だんだん遠ざかるように」など変化をつけて弾くことで、子どもに距離感を感じさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2の活動に引き続き、音をさらにじっくりと聴いて、その違いを確かめようとしているか。</li> <li>友だちどうしの意見交換が円滑になされているか。</li> <li>友だちの意見に真剣に耳を傾けているか。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>発表する態度や聴く姿勢などから、本時の学習を理解したという様子がうかがえるか。</li> </ul>	<p>C13: 帰ってくるときに、大きく聴こえた。 C14: 遠くでも大きく鳴るときがあった。 T: C6は、大きな音も小さな音も使いながら工夫していたのが良かったですね。 T: もっとおもしろいことをしましょう。動かなくても、音が変化しているように聴こえるかな? となりどうして話し合ってみよう。 C: (1分くらい話し合う。鈴を動かす動作をしながら考えている。) C15: 少しだけふると遠く、たくさんふると近くなる。 C16: 細かくふると遠く、がむしゃらにふると近くなる。 C17: 近くだとたくさんふると。遠くだとあんまりふらない。 T: この3人の人にふってもらいましょう。みんなは聴いて、確かめてね。 C15、16、17: (実演する。) T: 近づいたり、遠ざかったりするように聴こえましたか。(挙手をさせる。) C: (聴こえた人、聴こえなかった人の割合は半々くらい。) T: 聴こえなかった人へ、どうしてだろう? C18: 強くふりすぎていた。 C19: がむしゃらにふるの、人が動いているような感じがしない。 C20: 急に大きくなったり、途中で音が切れたりすると、動いていないように聴こえる。 T: C20は大事なことに気づいてくれたね。急に「小さく」から「大きく」なるのかな? C21: 真ん中がないといけな。 T: 瞬間移動ではなくて、だんだんと大きさを変えていくことが必要だよ。分かった? C: (まだ、多くの子が理解できていない様子。) T: 今日、どんなことが分かりましたか。 C22: 遠いときには弱くふって、近くだと強くふるとよ。 C23: 止まる直前まで聴いたら、どこで止まるのかがだいたい分かった。 C24: 本当は遠くまで大きく鳴らすんだけど、近くでも同じように聴こえるときがある。 T: いろんなことに気づけたね。今日のまとめを書きます。(遠ざかるときは弱く、近づくときは強くふると、同じ場所でも人が動いているように聴こえること、また「だんだんと」変化をつけないとそう聴こえないことを板書。)分かりましたか。 C: (ほぼ全員が手をあげる。) T: 最後に、これまでやったことを思い出しながら、音楽を聴いてみてね。動物の歌だよ。(ピアノで弾く。) C: (みんな) ぞうさん! T: 今から、ぞうさんが近づいてくるように弾きます。それと、ぞうさんが遠ざかっていくように弾きます。どっちがどっちか聴き比べてね。(終わったら挙手をさせる。) C: (2、3人迷っていたが、ほとんど全員、聴き比べることができている様子。) T: これからも、みんなが音楽を聴くとき、歌を歌うとき、近づいているのか、遠ざかっているのか聴き分けてみてください。 C: はい。</p>
---	---	---

## V. 考察

### 1. 授業規律に関して

第1回の授業では、ゲームを行うということもあり、子どもがざわつかないよう特に気をつけて、こまめに働きかけるようにした。しかし、やはり中盤以降になると、集中力が切れてしまう子どもが多くなることはある程度仕方がないと考える。呼びかけることも重要だが、この内容を45分間継続してやり続け

るということは、子どもの忍耐力の限度を超えているのではないかと感じた。

第2回の授業では、子ども1人ひとりの意見に耳を傾けすぎて、教師の意識が全員に伝わっていなかったように感じる。教師自身は意味のある授業をしていると思っているが、大多数の子どもの関心が教師に向いていない、という事態が起きることは授業の落とし穴なのではないか。子どもそれぞれの意見を大切に扱う音楽を「つくって表現」する学習では、このことはとりわけ重要な問題であろう。

第3回の授業では、第2回の授業の反省点を踏まえ、なるべく全員が授業に参加できる形を取り入れるようにした。たとえば、子どもをただ次々に指名するだけでは授業が停滞してしまうため、指名する人数を必要に応じて制限したり、クラス全体で集中できるように、質問を二者択一にすることによって全員に挙手させる機会を与えたり、また2人組での話し合いの時間を設けたり、というような工夫を随所に組み込みながら進めた。その結果、第2回よりは流れがスムーズになり、飽きる子どもも減ったように見受けられた。ただし、どのような授業形態にするかは、計画の段階ではもちろん、授業をしている間にも、教師が子どもの様子を臨機応変に判断しながら、なるべく効果的に取り入れることができるように十分吟味する必要があると考えられる。

## 2. 学習の前提となる技術力に関して

第1回の授業では、子どもと初めて向き合い、探りながら発問を行った。中には、教師の説明を聞いただけで目標を理解し、活発に発言する子どもが見てとれ、驚きを感じた。しかし他方では、なかなか授業に集中できていなかったり、別のことを考えたりしている様子の子どもの見受けられ、基礎的な技術力は、個々の子どもによってかなり差が大きいということを実感した。

さらには、実際に授業をしてみて、子どもだけではなく、教師側にも基礎的な技術力が要求されるのだということが分かった。発達段階が関係しているのだろうが、「2年生のことは」で一生懸命答えようとしている子どもたちに対して、教師側が、彼らの意図を正確に理解できていなかった部分は大きかったと感じる。たとえば、「緊張したけど楽しかった。」というC7の発言を、教師は気にとめずに進めてしまったが、子どもの真剣な思いが込められている発言であると考え、「なぜ緊張したのか」「どのように楽しかったのか」を、もう少し教師が踏み込んで具体的に聞いておくべきだったと反省している。子どもの力を最大限に引き出すことが教師の重要な役割である、ということを実感した。

第2回の授業では、第1回の授業と比較して子どもに発言させるチャンスをより多く与えるようにした。すると、子どももそれに応え、音を擬音語で忠実に再現したり、教師が気づかないような新鮮な意見を発表したりしていた。子ども側からの意欲的なアプローチが多く見られた、と言えるだろう。

しかし、それによって教師がそれぞれの意見に忠実に答えすぎて、授業の流れを止めてしまうという事態を生じさせてしまった。子どもの発言自体はすべて貴重なものだが、同じような意見が続いたときはテンポ良く流し、重要だと考えられる意見には、もっと細かく質問を投げかけるようにする、という教師の姿勢と技術力が問われる場面が多かったように思う。

第3回の授業では、教師が子どもとのつき合いに慣れ始めたこともあり、授業の流れはより改善されたのではないかと考えている。ただし、最後に感想を求めた際に、C22、23、24から、教師が意図した目標とは少しずれた答えが返ってくる、という場面があった。この状況を踏まえ、「同じ場所においても人が動いているように感じさせるには、鈴をだんだん強く、弱くふることが大切である」という目標を全員に理解させる必要性があるのではないかと考えた。そこで、次時の授業では、なるべく全員がこの目標を自分のもののできるように、より細かい授業を設定することを計画している。

## 3. 学習の系統性に関して

この点に関しては、3回の授業をとおしてある程度は達成できたのではないかと考えている。授業計画を立てる際にしっかりと目標を見据えていれば、段階的に授業を構成していくことが可能だからである。特に、授業の最初で「前やったことはどのようなことか」「何が分かったか」を確認して授業内容に入ることは、教師にとっても、また子どもたちにとっても、それまでの学習を整理するのに必要不可欠なものではないだろうか。

ただし、教師側が子どもの発言に気をとられて別の方向に流されてしまうと、授業時間がなくなって目標まで到達できなくなる危険性が高い、ということも事実である。音楽を「つくって表現」する学習の指導ではこのような事態が起りやすいということを念頭におき、教師が流れをくずさないよう軸を固めることは、学習の系統性を考える上では非常に重要な意味をもつのではないかと考えている。

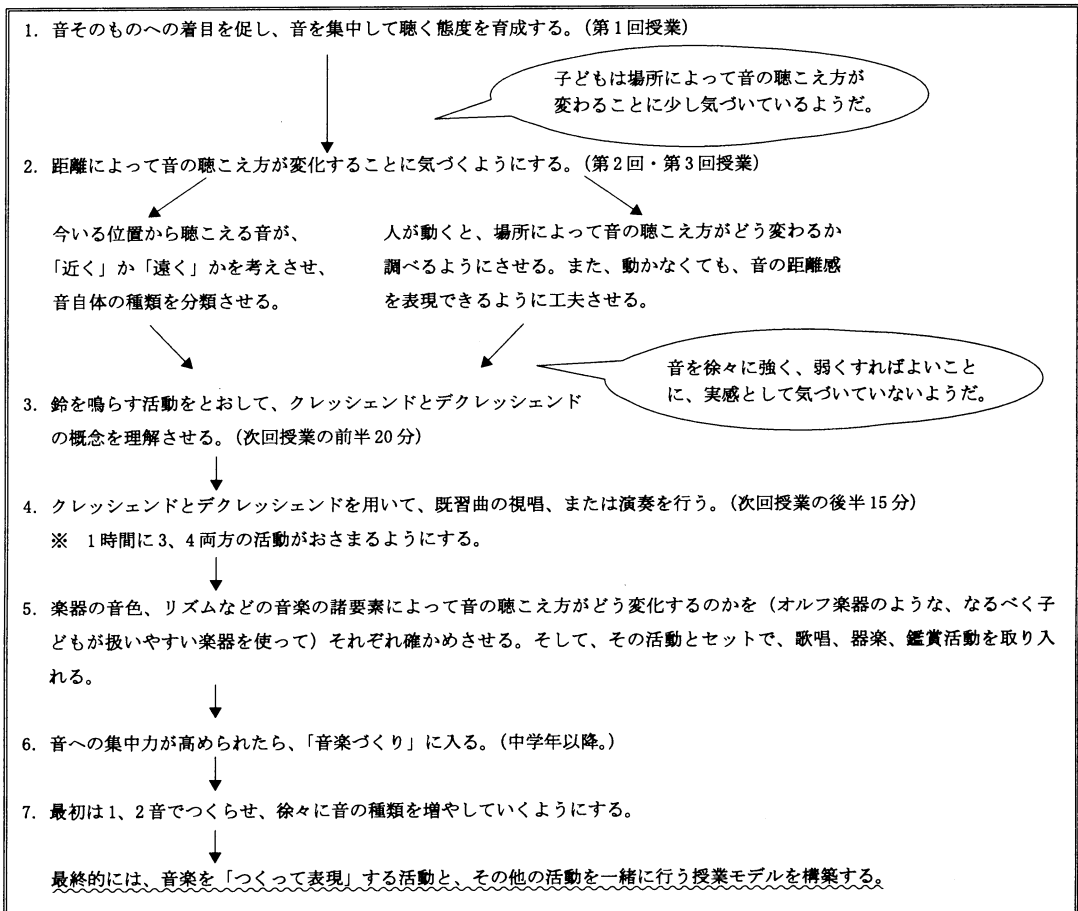
## VI. 今後の課題

今回は、まだ3回の実践しか行っておらず、研究を行うにはあまりにも記録不足である、という点が問題であろう。したがって、これからも継続した授業実践、および授業分析を行うことで、最終的には1つの有効な授業モデルを構築することを目指していきたいと考えている。さらに具体的に述べると以下のとおりである。

今は音そのものに注目させる授業を45分かけて行っているが、実際は授業時間の削減によって、音楽を「つくって表現」する活動にこれほど多くの時間をあてることはできないだろうと考えられる。より短時間で、しかも学習の理念を生かした活動を行うための工夫が必要なのではないかと考えている。また、音楽を「つくって表現」する活動は、他の領域、すなわち歌唱、器楽、鑑賞などへ効果的に応用できるという側面をもっているのではないかと筆者は考えている。子どもたちが培った音への感受力、集中力を、音楽を「つくって表現」する学習だけにとどめるのではなく、むしろ他のさまざまな音楽学習に生かすことによって、学校の音楽活動全体が良い方向に向かっていくのではないだろうか。

したがって、この2点を踏まえ、1回の授業の中で、音楽を「つくって表現」する学習を取り入れつつ、その活動を他の音楽学習につなげて考えることができるような授業モデルを構築していきたいと考える。このことを、理論研究とあわせて、今後の目的としながら研究を続けていきたい。

最後に、これまでの授業実践の流れと、今後の予定を以下にまとめる。



## <註および引用文献>

- 1) 創造的音楽学習とは、児童・生徒を音楽を生み出す存在として認識し、生徒たちみずから音を探し、自由に創作する活動を音楽教育の中に位置づけたものであると言える。(吉富功修編『音楽科 重要用語 300の基礎知識』明治図書, 2001, p. 293. 坪能由紀子氏の記述より。)
- 2) 平成元年度小学校学習指導要領音楽の「A表現」の(4)に含まれる。さらに(4)の「ア」は「簡単なリズムや旋律をつくる」活動、「イ」は「即興的に音を選んで表現する」活動(いずれも低学年の場合)を指している。(文部省『小学校学習指導要領解説 音楽編(平成11年5月)』教育芸術社, 1999, pp. 29-30.)
- 3) 吉富功修、石井信生、野波健彦、木村次宏、竹井成美、藤川恵子、緒方満『音楽教師のための行動分析—教師が変われば子どもが変わる』北大路書房, 1999, pp. 13-15.
- 4) Paynter, J., Aston, P. / 山本文茂、坪能由紀子、橋都みどり訳『音楽の語るもの—原点からの創造的音楽学習』音楽之友社, 1982, p. 9.
- 5) 同上書, p. 63.
- 6) 「GAMES2. LOCATE THE CAN」(p.3)、「GAMES9. SOUNDS IN A CIRCLE」(p.10)の一部を授業に取り入れた。(Schafer, R. Murray, *HearSing: 75 exercises in listening and creating music*, Arcana Editions, Indian River, Ontario, KOL 2BO, Canada, 2005.)
- 7) 「プロジェクト1 沈黙から音を取り出す」(pp. 40-47)の一部を授業に取り入れた。(Paynter, J. ./ 坪能由紀子訳『音楽の語るものII—音楽をつくる可能性』音楽之友社, 1994.)
- 8) 本授業実践では、「音をきく、音がきこえる」など、音に対して「きく」という言葉を用いる場合は、すべて「聴く」という漢字で表すことにする。

## <参考文献>

- ・ 池上敏、河本昌弘「音楽科における創作教育の理念とその必要性」『研究論集』山口大学教育学部, 第47号, 第3部, pp. 227-241, 1997.
- ・ 小曳加奈子「小学校音楽科における『創造的音楽学習』の授業実践に関する研究—音楽的感性と技能の、バランスのとれた実践をめざして—」広島大学教育学部卒業論文, 2004.
- ・ 松本恒敏、山本文茂『創造的音楽学習の試み この音でいいかな?』音楽之友社, 1985.
- ・ 松村麻利「高等学校における創造的音楽学習の指導例とその考察—内在する創造性を引き出すために」『音楽教育学』日本音楽教育学会, 第17巻, 第2号, pp. 43-52, 1988.
- ・ 松永洋介「音楽創作活動におけるイメージの形成と音への具現化に関する一考察—小学校2, 4, 6年生の音楽創作活動の分析を通して」『日本教科教育学会誌』日本教科教育学会, 第21巻, 第1号, pp. 59-65, 1998.
- ・ 松下充彦「音楽科教育におけるあそびと創造性についての一考察」『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇』静岡大学, 第14号, pp. 15-24, 1982.
- ・ 野村幸治、井崎明「創造的音楽学習の指導法に関する研究—『鶴の恩返し』の授業分析を通して」『教科教育学研究』日本教育大学協会第二常置委員会, 第13号, pp. 63-76, 1995.
- ・ 野村幸治、中村裕一郎編『音楽教育を読む—学生・教師・研究者のための音楽教育資料集』音楽之友社, 1995.
- ・ 野波健彦、池上敏「創造的音楽学習の系譜—子どもの主体性・創造性を重視した総合的な音楽学習を構想するために—2-」『研究論叢』山口大学教育学部, 第3部, 芸術・体育・教育・心理, 第42号, pp. 391-400, 1992.
- ・ 小笠原勇美「音楽科教育における創造性の育成」『岩手大学教育学部研究年報』岩手大学, 第53巻, 第1号, pp. 157-165, 1993.
- ・ 大槻寛「創作指導の理念と実践例」『音楽教育学』日本音楽教育学会, 第7号, pp. 26-35, 1977.
- ・ Paynter, J., Aston, P., *Sound and silence : classroom projects in creative music*, Cambridge University Press, 1970.
- ・ Paynter, J., *Sound and structure*, Cambridge University Press, 1992.
- ・ 佐藤真理「『創造的音楽学習』を基盤とした基礎指導」『武蔵野音楽大学研究紀要』『武蔵野音楽大学』

武蔵野音楽大学, 第30号, 1999.

- Schafer, R. Murray, *The composer in the classroom*, Toronto Berandol, 1969.
- Schafer, R. Murray, / 鳥越けい子、若尾裕、小川博司、今田匡彦訳『サウンドエデュケーション』春秋社, 1993.
- 高須一「創造的な音楽活動と子ども中心学習に関する一考察—その系譜と今日的視点」『音楽教育学』日本音楽教育学会, 第22巻, 第1号, pp. 23-34, 1992.
- 高須一「創造的音楽学習における『創造性育成』の再考—創造性育成に関するJ. F. Paynterの見解を通して」『音楽教育学』日本音楽教育学会, 第24巻, 第2号, pp. 25-36, 1994.
- 高須一「子どもの音楽づくりと音楽的発達に関する一研究—社会文化的アプローチを通してのSwanwick・Tillman発達モデルの検討と実践的授業分析」『音楽教育学』日本音楽教育学会, 第28巻, 第1号, pp. 6-22, 1998.
- 高須一「小学校高学年の『音楽づくり授業』における教師の指導性に関する一考察—『ハウス・ミュージック』の授業分析を中心に」『日本教科教育学会誌』日本教科教育学会, 第22巻, 第1号, pp. 31-41, 1999.
- 竹井成美「音楽科教育における即興表現・創作の試み—Keith Swanwickの『音楽的発達の螺旋型モデル』図を生かした中学校における即興表現・創作を中心として」『音楽教育学』日本音楽教育学会, 第25巻, 第3号, pp. 1-16, 1995.
- 坪能由紀子『音楽指導ハンドブック 音楽づくりのアイデア』音楽之友社, 1995.
- 坪能由紀子「戦後音楽科教育の反省と展望—新たな音楽授業の創造に向けて」『音楽教育学』日本音楽教育学会, 第25巻, 第1号, pp. 30-43, 1995.
- 坪能由紀子「学校教育の現状と未来—音楽づくりによって音楽科はどのように変わりうるか」『音楽教育学』日本音楽教育学会, 第26巻, 第3号, pp. 31-38, 1996.
- 坪能由紀子「音楽づくりと広場の音楽」『音楽教育学』日本音楽教育学会, 第27巻, 第4号, pp. 17-19, 1998.
- 上田光江「小学校の音楽科教育における創造的な音楽づくりの学習—遊びの論理に基づいた音楽の学習と分かち合いをめざした音楽授業の構想」『芸術教授学』日本芸術教授学研究会, 第6号, pp. 47-54, 2003.
- 山本文茂「音楽教育現代化の展望—「創造性育成」の内包と外延」『音楽教育学』日本音楽教育学会, 第6号, pp. 74-83, 1976.
- 山本文茂「即興的表現学習の体系と展望」『音楽教育学』日本音楽教育学会, 第20巻, 第1号, pp. 25-27, 1990.
- 山本文茂「戦後音楽科教育の反省と展望—新たな音楽授業の創造に向けて」『音楽教育学』日本音楽教育学会, 第25巻, 第1号, pp. 30-43, 1995.